

令和5年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第3号（7月予報）

令和5年6月27日 秋田県病害虫防除所

【内容】 Ⅰ. 予報の要点 Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報 Ⅲ. 発生予報と防除対策 Ⅳ. 気象予報 Ⅴ. 気象データ Ⅵ. 用語の説明	【問合せ先】 秋田県病害虫防除所 018-881-3660 秋田県農業試験場 018-881-3326 秋田県果樹試験場 0182-25-4224 かづの果樹センター 0186-25-3231 天王分場班 018-878-2251
【お知らせ】 ◇今回の予報対象期間は7月を主とします。次回の発表は令和5年7月28日の予定です。 ◇農作物病害虫発生予察情報は秋田県病害虫防除所のウェブサイトでご覧いただけます。 https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/ ◇農薬の再評価制度等により使用方法が変更された農薬の情報については、秋田県のウェブサイトでご確認ください。 https://www.pref.akita.lg.jp/suiden/ ◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関にご相談ください。 最新の農薬登録状況は、農林水産省ウェブサイト「農薬登録情報提供システム」でご確認ください。 https://pesticide.maff.go.jp/ ◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのウェブサイトでご登録いただけます。 https://www.e-komachi.jp/	

I. 予報の要点

水 稲	葉いもちの全般発生開始期は早い、発生量はやや多いと予想されます。余り苗は直ちに処分し、余り苗や持ち込みからの伝染を確認した場合は速やかに防除してください。 斑点米カメムシ類の発生時期は早く、発生量は多いと予想されます。水田内に雑草が多発すると、アカスジカスミカメの水田内への侵入が助長されるため、中・後期剤の使用にあたっては、発生雑草の草種や生育程度を観察して、適切な薬剤を選択してください。
野 菜	野菜の病害では、きゅうりのうどんこ病が多いと予想されます。発病を確認した場合は、薬剤を葉の表裏にかかるよう散布してください。 害虫では、ねぎ（夏どり）のアザミウマ類、ネギハモグリバエがやや多いと予想されます。多発すると防除効果が劣るので、発生初期から薬剤散布してください。また、トマトのアザミウマ類が多いと予想されます。既に急増期が確認されているため、直ちに防除を開始してください。
花 き	きくの白さび病、アブラムシ類、アザミウマ類の発生量は多いと予想されます。ほ場を観察して、発生が見られたら薬剤散布を実施してください。
果 樹	りんごとなしでは、黒星病の発生が多いと予想されます。りんごは防除対策情報第6号、なしは防除対策情報第4号を参照し、発病部位の摘み取りや薬剤防除を徹底してください。 ぶどうでは、灰色かび病の発生が多いと予想されます。防除対策情報第7号を参照し、発病部位や花器残さなどの伝染源を摘み取り適切に処分してください。

Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
水 稲	葉いもち	全県	早い	やや少ない	やや多い
	紋枯病	全県	やや早い	—	多い
	稲こうじ病	全県	やや早い	—	やや少ない
	斑点米カメムシ類(第2世代) (アカスジカスミカメ)	全県	早い	多い	多い
	(アカヒゲホソミドリカスミカメ)		早い	多い	多い
	コバネイナゴ	全県	—	—	やや多い
アワヨトウ(第2世代幼虫)	全県	—	—	—	
大 豆	ウコンノメイガ	全県	早い	—	—
	食葉性鱗翅目幼虫	全県	—	—	—
ねぎ (夏どり)	さび病	全県	—	—	—
	べと病	全県	—	—	—
	アザミウマ類(ネギアザミウマ)	全県	—	—	—
	ネギハモグリバエ	全県	—	—	—
きゅうり	べと病	全県	—	—	—
	うどんこ病	全県	—	—	—
	斑点細菌病	全県	—	—	—
	アブラムシ類(ワタアブラムシ)	全県	—	—	—
キャベツ (初夏どり)	コナガ	全県	—	—	—
	モンシロチョウ	全県	—	—	—
	ヨトウガ(第1世代)	全県	—	—	—
トマト	灰色かび病	全県	—	—	—
	葉かび病	全県	—	—	—
	すすかび病	全県	—	—	—
	アザミウマ類(ヒラズハナアザミウマ)	全県	—	—	—
えだまめ	食葉性鱗翅目幼虫	全県	—	—	—
きく	白さび病	全県	—	—	—
	アブラムシ類(ワタアブラムシ)	全県	—	—	—
	アザミウマ類 (ヒラズハナアザミウマ) (ミカンキイロアザミウマ)	全県	—	—	—
	ハダニ類	全県	—	—	—
りんどう	葉枯病	全県	—	—	—
	リンドウホソハマキ	全県	—	—	—
	ハダニ類	全県	—	—	—
野菜・花き 共通	オオタバコガ	全県	—	—	—

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
りんご	斑点落葉病	全県	—	多い	多い
	黒星病	全県	—	やや多い	多い
	炭疽病	全県	—	—	平年並
	輪紋病	全県	—	—	平年並
	褐斑病	全県	—	平年並	平年並
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	全県	—	やや多い	やや多い
	ナミハダニ	全県	—	多い	多い
	リンゴハダニ	全県	—	—	多い
	果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	全県	—	平年並	やや多い
	キンモンホソガ (第3世代)	全県	早い	多い	多い
なし (日本なし)	黒星病	県北部・県中央部	—	多い	多い
	黒斑病	県北部・県中央部	—	平年並	平年並
	輪紋病	県北部・県中央部	—	—	平年並
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	県北部・県中央部	—	平年並	やや多い
	ナミハダニ	県北部・県中央部	—	やや少ない	平年並
	リンゴハダニ	県北部・県中央部	—	平年並	やや多い
	果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	県北部・県中央部	—	平年並	やや多い
ぶどう	べと病	県南部	平年並	平年並	平年並
	灰色かび病	県南部	—	多い	多い
	晩腐病	県南部	—	平年並	平年並
	チャノキイロアザミウマ	県南部	—	平年並	やや多い
	クビアカスカシバ	県南部	—	多い	多い
飼料作物	アワヨトウ (第2世代幼虫)	全県	—	平年並	平年並

Ⅲ. 発生予報と防除対策

A 水稻

病虫害名	予報内容	
	発生時期（全般発生開始期）	発生量
1. 葉いもち	早い（前年より早い）	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（-/+）。

イ、BLASTAM法による感染好適判定（県内24アメダス地点）では、6月23～24日に感染好適条件及び準感染好適条件が訪れたと判断された（-/+）。

ウ、6月3～5半旬の余り苗調査における発病地点率は、県北部0%（平年6.3%）で低い、県中央4.4%（平年7.2%）で平年並、県南部3.6%（平年2.5%）でやや高く、全県平均は2.9%（平年5.5%）でやや低かった（ /-）。

エ、病斑増加状況調査では6月25日までに病斑増加は認められていない（±/±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、6月23～24日の感染による葉いもちは6月30日頃から発生すると予想される。

イ、ほ場を巡回し、余り苗や本田での発病状況を確認する。生育が遅れているほ場では肥効が遅れ、7月以降稲体の窒素濃度が高まり、いもち病への抵抗力が低下するので特に注意する。

ウ、余り苗はいもち病の発病の有無にかかわらず、直ちに泥の中に埋めて処分する。余り苗で発病が確認された場合、発病ほ場及び周辺ほ場では今後の発病状況に注意する。

エ、これまで葉いもち防除剤を使用していない場合は、直ちにオリゼメート粒剤を10a当たり2kg、又はルーチン粒剤を10a当たり1kgを散布する。

オ、余り苗や持ち込みからの伝染を確認した場合は、直ちにブラシン剤又はノンブラス剤の茎葉散布を行う。その後、必要に応じてビーム剤を追加散布する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 紋枯病	やや早い（前年並）	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（-/+）。

イ、前年収穫期の発生量は多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は、出穂直前～穂揃期にバシタック剤、バリダシン剤、モンカット剤、モンセレン剤のいずれかで防除する。その際、薬剤が株元に到達するように散布する。

イ、粒剤を使用する場合は、前年多発したほ場で本病を対象とした育苗箱施用剤を使っていないほ場に限定。散布時期はモンガリット粒剤が出穂20～10日前、リンバー粒剤が出穂15～5日前である。

ウ、粒剤は湛水状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は水を入れない。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しをしない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
3. 稲こうじ病	やや早い (-)	やや少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (-/±)。

イ、前年収穫期の発生量は少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、前年多発したほ場では出穂20～10日前に、ドイツボルドーA、ボルドー、トライフロアブル、Zボルドー粉剤DL、モンガリット粒剤のいずれかを散布する。

イ、ドイツボルドーA、ボルドーは高濃度で散布すると薬害を生じやすい。

ウ、Zボルドー粉剤DLは高温時には薬害を生じやすいので夕方の涼しい時に散布する。

エ、粒剤は湛水状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は水を入れない。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しをしない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. 斑点米カメムシ類 (第2世代) アカスジカスミカメ アカヒゲホソミドリカスミカメ	早い(前年よりやや早い) 早い(前年よりやや早い)	多い(前年並) 多い(前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (-/±)。

イ、牧草地のすくい取り調査(3地点)における越冬世代成虫の初確認日の平均は、アカスジカスミカメで5月30日(平年6月10日)、アカヒゲホソミドリカスミカメで5月18日(平年5月29日)といずれも早かった (-/)。

ウ、各予察灯(6地点)における6月4半旬までの総誘殺数はアカスジカスミカメで268頭(平年36頭)、アカヒゲホソミドリカスミカメで75頭(平年38頭)といずれも多かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、水田内に雑草が多発すると、アカスジカスミカメの水田内への侵入が助長される。そのため、発生雑草の草種や生育程度を観察して、適切な中・後期除草剤を選択し、雑草防除を徹底する。

イ、稲の出穂15～10日前までに農道や畦畔、休耕田等の草刈りを地域で一斉に行う。

ウ、水田畦畔刈り込み代用剤を7月上～中旬に散布すると40～50日の抑草効果が期待できる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. コバネイナゴ	-	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、前年乳熟期の発生量から、越冬量は平年並と推定される (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、要防除密度は株当たり0.5頭以上(穂ばらみ期まで)であり、これは本田における20回のすくい取りで100頭以上に相当する。要防除密度に達したほ場では、若中齢期の7月上～下旬にトレボン粉剤DL、トレボン乳剤、トレボンEWのいずれかを畦畔を含めて散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. アワヨトウ (第2世代幼虫)	—	平年並 (—)

(1) 予報の根拠

ア、6月4半旬までの糖蜜トラップ(2地点)における総誘殺数は、4頭(平年4.7頭)で平年並だった(/±)。

イ、6月4～5半旬の牧草地等巡回調査における第1世代幼虫は0.01頭/m²(平年0.12頭/m²)で平年並だった(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、本種は主にイネ科作物に被害を及ぼすため、小麦、牧草地等からの幼虫の移動、加害に注意する。特に、中干し時は水田内に侵入しやすいので、畦畔、農道の法面の雑草に発生が見られたら湛水状態を保ち、侵入を防ぐ。また、群生相となった黒化型の幼虫が確認された場合は、直ちにスミチオン乳剤又はスミチオン粉剤3DLで防除する。

イ、本種は突発的に発生することがあるので、今後の予察情報に注意する。

7. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
白葉枯病	—	—	平年並	防除が必要なほ場はないと見込まれる。
褐色菌核病	—	—	やや少ない	前年収穫期の発生量はやや少なかった。紋枯病との同時防除が可能である(モンセレン剤を除く)。
ニカメイガ (2回発生地帯の 第1世代)	—	多い	多い	各予察灯(6地点)における越冬世代成虫の総誘殺数(5月1半旬～6月4半旬)は36頭(平年9.7頭)で多かったが、防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。
コブノメイガ	—	—	—	6月25日現在、飛来は確認されていない。今後の予察情報に注意する。
セジロウシ	—	—	—	6月25日現在、飛来は確認されていない。防除適期は成虫飛来盛期の約3週間後のため、今後の予察情報に注意する。
フタオビコヤガ (イネアオムシ) (第2世代)	—	やや少ない	やや少ない	抽出ほ場調査(6月3半旬)における第1世代幼虫の発生量はやや少なかった。防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。

B 大豆

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. ウコンノメイガ	早い(前年より早い)	平年並(前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている(—/±)。

イ、大仙市予察灯における成虫初誘殺日は、6月4日(平年7月7日)で早かった(—/)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、生育が旺盛なほ場で多発する傾向があるので注意する。

イ、7月6半旬にはほ場全体で40～60茎の葉巻数を調査して、茎当たり葉巻数が1.3個以上の場合には、8月上旬までにカスケード乳剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤、プレバソンフロアブル5のいずれかを散布する。

ウ、発生源となる成虫は長距離移動による飛来・侵入が主であり、急激に発生量が増加する場合がありますので、今後の予察情報に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 食葉性鱗翅目幼虫	—	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、各予察灯（6地点）における6月4半旬までのツメクサガの総誘殺数は8頭（平年0.9頭）で多かった（ /+）。

ウ、6月中旬のえだまめの巡回調査における発生茎率は5.3%（平年7.9%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除対象がツメクサガの場合は、幼虫の発生初期（若齢期）にエルサン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブルのいずれかを散布する。

C ねぎ（夏どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. さび病	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /-）。

イ、6月4半旬の巡回調査における発病株率は6.7%（平年1.1%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、降雨が続くと発病しやすく、被害の拡大が早まるので、予防や発病初期の防除に努める。

イ、発病が多くなってからでは防除効果が劣るため、発病初期からアミスター20フロアブル（RACコード：11）、オンリーワンフロアブル（同：3）、カナメフロアブル（同：7）等を散布する。ただし、アミスター20フロアブルは近接散布するとねぎを湾曲させる薬害を生じる場合があるので、散布間隔を2週間以上空ける。

ウ、RACコードが3、7、11の薬剤は、耐性菌の出現を回避するため連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. べと病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、6月4半旬の巡回調査における発病株率は0.2%（平年1.3%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、降雨が続くと発病しやすく、被害の拡大が早い。定期的に、ジマンダイセン水和剤、ダコニール水和剤1000等を散布し、予防に努める。

イ、発病が見られたらオロンディスウルトラSC（RACコード：49・30）、ザンプロDMフロアブル（同：45・40）、リドミルゴールドMZ（同：4・M3）等を散布する。

ウ、RACコードが4、11、27、40、45、49の薬剤は、耐性菌の出現を回避するため連用しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3. アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、6月4半旬の巡回調査における食害株率は7.6%（平年9.4%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アグロスリン乳剤（RACコード：3A）、アルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤（同：4A）、グレーシア乳剤（同：30）、ダントツ水溶剤（同：4A）、ディアナSC（同：5）、ファインセーブフロアブル（同：34）、ベネビアOD（同：28）等を茎葉散布、又はダントツ粒剤（同：4A）、プリロツツ粒剤（同：28）、ミネクトデュオ粒剤（同：28・4A）を株元散布する。

イ、抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4. ネギハモグリバエ	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、6月4半旬の巡回調査における食害株率は3.9%（平年7.6%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期から防除する。アグロスリン乳剤（RACコード：3A）、グレーシア乳剤（同：30）、ダブルシューターSE（同：5・未）、ダントツ水溶剤（同：4A）、ディアナSC（同：5）、ファインセーブフロアブル（同：34）、ベネビアOD等を茎葉散布（同：28）、又はダントツ粒剤（同：4A）、プリロツツ粒剤（同：28）、ミネクトデュオ（同：28・4A）粒剤を株元散布する。特に、多数の幼虫が集中的に加害する別系統（バイオタイプB）の発生が確認されている場合は、防除を徹底する。

イ、抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

5. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
アブラムシ類 (ネギアブラムシ)	—	平年並	平年並	防除が必要な場合は少ないと見込まれる。

D きゅうり

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. べと病	—	平年並 (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、6月4半旬の巡回調査における発病株率は0.4% (平年0.8%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、敷きわら等を行い、雨による土のはね上がりを防ぐ。

イ、発病した葉は早めに除去し、ほ場外で処分する。

ウ、定期的に薬剤を散布し、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

エ、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル (RACコード: 11)、ゾーベックエニベル顆粒水和剤 (同: 49・M3)、ベトファイター顆粒水和剤 (同: 27・40)、ホライズンドライフロアブル (同: 27・11)、リドミルゴールドMZ (同: 4・M3) 等の治療効果がある薬剤を葉の表裏にかかるとように散布する。ただし、アミスター20フロアブルは薬害防止のため、浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。

オ、RACコードが4、11、21、40、49の薬剤は、耐性菌の出現を回避するため連用しない。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. うどんこ病	—	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。

イ、6月4半旬の巡回調査における発病株率は0.2% (平年0%) だった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、トリフミン剤 (RACコード: 3)、パルミノ (同: M10)、ポリオキシシAL水和剤 (同: 19)、ポリベリン水和剤 (同: 19・M7) 等の治療効果のある薬剤を葉の表裏にかかるとように散布する。ただし、アミスター20フロアブルは薬害防止のため、浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。

イ、RACコードが1、3、9、11、19の薬剤は、耐性菌の出現を回避するため連用しない。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
3. 斑点細菌病	—	やや少ない (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、6月4半旬の巡回調査における発病株率は0.6%（平年2.5%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、強風等により傷が付くと感染しやすくなるので防風対策を講じる。
- イ、過剰な追肥をしない。また、過繁茂による通風しの不良を改善する。
- ウ、発病した葉、茎、果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- エ、銅水和剤による予防散布に努める。ただし、茎葉を硬化させるので注意する。
- オ、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4. アブラムシ類 (ワタアブラムシ)	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。
- イ、6月4半旬の巡回調査における発生株率は17.3%（平年16.0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ほ場周辺の除草を徹底する。
- イ、ウイルスの伝染を防ぎ、その後の増殖を抑制するために発生初期の防除を徹底する。
- ウ、定期的に、アグロスリン乳剤（RACコード：3A）、コルト顆粒水和剤（同：9B）等を茎葉散布する。
- エ、抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

E キャベツ（初夏どり）

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. コナガ	—	平年並（-）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。
- イ、秋田市予察ほにおける6月1～4半旬のフェロモントラップの誘殺数は119頭（平年180.0頭）でやや少なかった（ /-）。
- ウ、6月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0.06頭（平年0.04頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、幼虫が見られる場合は、収穫前日数に注意してアフーム乳剤（RACコード：6）、ディアナSC（同：5）、コテツフロアブル（同：13）、フェニックス顆粒水和剤（同：28）、プレバソソフロアブル5（同：28）、プロフレアSC（同：30）等を散布する。
- イ、抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. モンシロチョウ	－	やや多い(－)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている(/+)。

イ、6月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭(平年0頭)で平年並だった(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、コナガとの同時防除に努める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ヨトウガ(第1世代)	－	平年並(－)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている(/+)。

イ、秋田市予察ほにおける6月1～4半旬のフェロモントラップの誘殺数は0頭(平年1.6頭)で少なかった(/－)。

ウ、6月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭(平年0頭)で平年並だった(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、コナガとの同時防除に努める。

F トマト

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 灰色かび病	－	やや少ない(前年より少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている(/±)。

イ、6月中旬の巡回調査における発病株率は0%(平年0.5%)でやや低かった(/－)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。

イ、発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。

ウ、発病前からゲッター水和剤(RACコード: 1・10)、ロブラール水和剤(同: 2)、ベルクート水和剤(同: M7)などで予防散布に努める。

エ、耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。特にRACコードが1、2の薬剤は耐性菌が確認されているので、薬剤の選択に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 葉かび病	－	平年並(前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている(/±)。

イ、6月中旬の巡回調査における発病株率は0%(平年0%)で平年並だった(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、多湿時に発生しやすいので、過度のかん水を避け、ハウス内の換気に努める。
- イ、発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ、発病前からゲッター水和剤（RACコード：1・10）、ダコニール1000（同：M5）、ベルクート水和剤（同：M7）などで予防散布に努める。
- エ、耐性菌の出現を回避するため、RACコードが1、3、7、10、11の薬剤は連用しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3. すすかび病	—	平年並(前年並)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（/±）。
- イ、6月中旬の巡回調査における発病株率は0%（前年0%）だった（/±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、多湿時に発生しやすいので、過度のかん水を避け、ハウス内の換気に努める。
- イ、発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ、潜伏期間が2週間と長いので、発病前からダコニール1000（RACコード：M5）などで予防散布に努める。発病が確認されたらニマイバー水和剤（同：10・1）、ファンベル顆粒水和剤（同：11・M7）を散布する。
- エ、耐性菌の出現を回避するため、RACコードが1、3、7、10、11の薬剤は連用しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4. アザミウマ類 (ヒラズハナアザミウマ)	—	多い(前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（/+）。
- イ、北秋田市防除適期決定ほにおける6月1～4半旬の青色粘着板への誘殺数は118頭（平年77.9頭）でやや多かった（/+）。
- ウ、6月中旬の巡回調査における被害果率は0.07%（平年0%）だった（/+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ハウス周辺の雑草地は発生源となるので除草に努める。
- イ、急増期（青色粘着板での10日当たり誘殺数がおおむね50頭/250cm²以上、かつ、誘殺数が前回誘殺数のおおむね5倍以上）は6月上旬に確認されているため、直ちに防除を開始する。
- ウ、ベストガード水溶剤（RACコード：4A）、スピノエース顆粒水和剤（同：5）、マッチ乳剤（同：15）などを花房に付着するように丁寧に散布する。ただし、抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

5. その他病虫害の発生予報と防除対策

病虫害名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
疫病	—	平年並	平年並	防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。

G えだまめ

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 食葉性鱗翅目幼虫	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、各予察灯 (6地点) における6月4半旬までのツメクサガの総誘殺数は8頭 (平年0.9頭) で多かった (/+)。

ウ、6月中旬の巡回調査における発生茎率は5.3% (平年7.9%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除対象がツメクサガの場合は、幼虫の発生初期 (若齢期) にアディオン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブルのいずれかを散布する。

H きく

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 白さび病	—	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、6月中旬の巡回調査における発病葉率は0.2% (平年0.0%) で高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病葉は摘み取り、ほ場外で処分する。

イ、耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. アブラムシ類 (ワタアブラムシ)	—	多い (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。

イ、6月中旬の巡回調査における発生茎率は14.6% (平年4.5%) で高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ほ場周辺の雑草地は発生源となるので、除草に努める。

イ、ウイルスの伝染を阻止し、その後の増殖を抑制するため、発生初期の防除を徹底する。

ウ、発生初期から、オルトラン水和剤 (RACコード: 1B)、アグロスリン乳剤 (同: 3A)、トレボンEW (同: 3A)、アルバリン顆粒水溶剤 (同: 4A)、モスピラン顆粒水溶剤 (同: 4A) を散布する。

エ、抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. アザミウマ類 (ヒラズハナアザミウマ) (ミカンキイロアザミウマ)	—	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。

イ、6月中旬の巡回調査における発生茎率は9.4% (平年0.1%) で高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ハウス周辺の雑草地は発生源となるので、除草に努める。

イ、発生が見られたらグレーシア乳剤等の茎葉散布を実施し、密度の低下を図る。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. ハダニ類	—	やや多い (-)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一RACコードの薬剤は連用しない。

I りんどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 葉枯病	—	やや少ない (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、6月中旬の巡回調査における発病茎率は1.0% (平年7.0%) でやや低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、過剰な追肥を控え、過繁茂を避ける。

イ、オンリーワンフロアブル、ベフラン液剤25等の薬剤で防除するが、花の汚れを避けるためにオーソサイド水和剤80やZボルドーは着蕾期以降に使用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. リンドウホソハマキ	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。

イ、6月中旬の巡回調査における被害茎率は0.1% (平年1.2%) でやや低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、茎部に食入後の幼虫は薬剤防除が難しいため、生長部の被害を見つけたら折り取り、土中に埋

めるなど適切に処分する。

イ、ほ場をよく観察し、成虫又は潜葉痕及び食害痕が認められたら、アディオフロアブル、ディアナSC、フェニックス顆粒水和剤等の薬剤で防除する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3. ハダニ類	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、6月中旬の巡回調査における発生茎率は2.3%（平年1.2%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、カネマイトフロアブル、コロマイト水和剤、パロックフロアブル等の薬剤で防除するが、マイトコーネフロアブルの使用時期は開花前までである。

J 野菜・花き共通

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. オオタバコガ	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、秋田市防除適期決定ほにおける6月1～4半旬のフェロモントラップへの誘殺数は7頭（平年1.5頭）で多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、例年8月以降に被害が多くなるが、近年は、被害発生時期が早い傾向にあるので、発生初期の防除に努める。

K りんご

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 斑点落葉病	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、6月中旬の巡回調査における発病葉率は0.7%（平年0.1%）、発病地点率は30.0%（平年12.7%）でいずれも高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。

イ、高温・多雨の多発条件下では、ポリオキシシAL水和剤（RACコード：19）、ユニックス顆粒水和剤47（同：9）のいずれかを主剤に加用して使用する。また、これらの薬剤は年1回の使用とする。ただし、ポリオキシシAL水和剤の効力低下がみられる園地では同剤を使用しない。

ウ、QoI剤（RACコード：11）は耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用とする。

エ、ベフキノン水和剤、ベフラン液剤25は、千秋、玉林で果実色に障害が生じるおそれがあるので、

7月中旬以降に使用する。

オ、パスポート顆粒水和剤の使用時期は収穫45日前までなので、早生品種に散布する場合は注意する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 黒星病	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（/±）。

イ、6月中旬の巡回調査における発病果そう率は1.8%（平年1.2%）、発病地点率は15.0%（平年11.4%）でいずれもやや高かった（/+）。

ウ、6月中旬の巡回調査における発病果率は0.3%（平年0.1%）で高く、発病地点率は10.0%（平年6.1%）でやや高かった（/+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、6月27日発表の防除対策情報第6号を参照して防除する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3. 炭疽病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（/±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ニセアカシアは伝染源となるので、園地の近くにある木は伐採する。

イ、被害果は見つけ次第摘み取り、適切に処分する。

ウ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を10～12日程度に短縮する。

エ、薬剤の使用時期は、パスポート顆粒水和剤が収穫45日前、ジマンダイセン水和剤が収穫30日前までなので、早生品種に散布する場合は注意する。

病虫害名	予報内容	
	感染時期	感染量
4. 輪紋病	—	平年並（—）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（/±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する（塗布は3回以内）。

イ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を10～12日程度に短縮する。

ウ、薬剤の使用時期は、パスポート顆粒水和剤が収穫45日前まで、ジマンダイセン水和剤が収穫30日前までなので、早生品種に散布する場合は注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. 褐斑病	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、6月中旬の巡回調査における発病新梢率は0% (平年0.0%)、発病地点率は0% (平年0.5%) でいずれも平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を10~12日程度に短縮する。

イ、多発が予想される場合は、7月中~下旬にトップジンM水和剤 (RACコード: 1)、ベンレート水和剤 (同: 1) のいずれかを散布する。なお、トップジンM水和剤、ベンレート水和剤は耐性菌の出現を回避するため、年1~2回の使用とし、必ず保護殺菌剤 (オーソサイド水和剤80、チオノックフロアブル等) に加用する。上記2剤の効力が低下している園地では、代わりにユニックス顆粒水和剤47 (同: 9) を保護殺菌剤に加用して散布する。

ウ、パスポート顆粒水和剤の使用時期は収穫45日前までなので、早生品種に散布する場合は注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、防除適期決定ほ7地点における6月1~4半月のフェロモントラップへの平均誘殺数は19.3頭 (平年14.6頭) でやや多かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、合成ピレスロイド剤を使用する場合の散布適期は、県北部が7月上~中旬、県中央部・県南部では6月下旬~7月上旬までとする (未散布園の場合)。

ウ、スミチオン水和剤40、パーマチオン水和剤は薬害 (黄変落葉) が発生するおそれがあるので、高温時や衰弱樹には散布しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. ナミハダニ	—	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、6月中旬の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0.03頭 (平年0.00頭)、発生地点率は30.0% (平年7.7%) でいずれも高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生の多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤につき年1回使用、かつ作用点

が同一の剤は年1回までの使用とする。

ウ、ダニオーテフロアブル（RACコード：33）を使用する場合は、防除効果の低下を避けるため、銅剤（銅を含む製剤）を使用しない。

エ、エコマイト顆粒水和剤（RACコード：23）の適用作物はりんごとおうとうのみなので、これら以外の果樹類に薬液がかからないようにする。また、ダニゲッターフロアブルは、同一のRACコードのため注意する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
8. リンゴハダニ	—	多い（前年並）

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、6月中旬の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0.02頭（平年0頭）、発生地点率は10.0%（平年0%）だった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、7. ナミハダニの項を参照する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
9. 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、防除適期決定ほ7地点における6月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の平均誘殺数は28.4頭（平年27.0頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内へのカメムシ類の飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は地域によって異なるので、飛来状況をよく観察する。山間部の園地では特に注意する。

イ、園内への飛来が多い場合は、アクタラ顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤、ダントツ水溶剤のいずれかを散布する。

ウ、スミチオン水和剤40は、薬害（黄変落葉）が発生するおそれがあるので、高温時や衰弱樹には散布しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
10. キンモンホソガ (第3世代)	早い（前年より早い）	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、横手市予察ほのフェロモントラップにおける第1世代成虫の誘殺最盛半旬は6月2半旬（平年6月4半旬）で早かった（ -/ ）。

イ、6月中旬の巡回調査における食害葉率は0.4%（平年0.1%）で高く、食害地点率は25.0%（平年17.3%）でやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害葉は集めて焼却するか土中に埋める。

イ、本年は発生時期が早いと予想されるため、防除適期は県北部で7月2～3半旬、県中央部・県南部は7月1～2半旬と見込まれる。

11. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
ハマキムシ類	—	やや少ない	やや少ない	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。

L なし（日本なし）

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 黒星病	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、6月中旬の巡回調査における黒星病の果そう葉の発病葉率は0.15%（平年0.04%）、発病地点率は40.0%（平年8.9%）でいずれも高く、果実の発病果率は0.17%（平年0.05%）、発病地点率37.5%（平年10.0%）でいずれも高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、6月19日発表の防除対策情報第4号を参照して防除する。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 黒斑病	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、6月中旬の巡回調査における果そう葉の発病葉率は0.04%（平年0.87%）でやや低く、発病果率は0.11%（平年0.08%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、県内で栽培されている品種では、南水、八雲、二十世紀に発病が多い。

イ、不要な徒長枝は早めに剪去し、適切に処分する。

ウ、防除剤の散布は10日間隔で行い、降雨が続くと予想される場合又は被害が発生している園地では散布間隔を7日とする。

エ、多発条件下では、ポリオキシソル水剤（RACコード：19）を主剤に加用するか、ベルクガード水剤（同：M7・M3）又はポリキャプタン水剤（同：19・M4）を散布する。ただし、耐性菌の出現を回避するため、ポリオキシソル剤の使用回数は年間3回以内とする。

オ、袋かけ前の防除を徹底し、散布した防除剤が乾いたら速やかに袋かけを行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
3. 輪紋病	—	平年並 (—)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、伝染源であるいぼ病斑の多い枝は切除し焼却処分する。枝幹の病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する (塗布は年3回以内)。

イ、薬剤の散布は10日間隔で行う。高温、多雨の場合は散布期間を短くする (7日間隔程度)。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、防除適期決定ほ (4地点) における6月1～4半旬のフェロモントラップへのモモシンクイガの平均誘殺数は11.3頭 (平年12.0頭) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、合成ピレスロイド剤で防除する場合、県中央部では7月上旬までに、県北部では7月上～中旬に実施する (未散布園の場合)。

ウ、モスピラン顆粒水溶剤は、長十郎、新高、八雲、愛甘水に対して薬害のおそれがあるので散布しない (葉裏に黒色斑)。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. ナミハダニ	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、6月中旬の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0頭 (平年0.01頭) でやや少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、不要な徒長枝は早めに剪去し、焼却する。

イ、発生が多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。

ウ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は、1薬剤年1回の使用に限定し、かつ作用点が同一の剤は、年1回の使用として効力低下を防ぐ。

エ、ダニオーテフロアブル (RACコード:33) を使用する園では、オキシラン水和剤 (同:M4・M1)、バフキノン水和剤 (同:M7・M1) などの銅を含む製剤を使用しない (銅剤と混用及び近接散布での防除効果の低下)。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. リンゴハダニ	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、6月中旬の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0頭 (平年0頭) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ナミハダニとの同時防除に努める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、防除適期決定ほ (4地点) における6月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の平均誘殺数は35.3頭 (平年32.0頭) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内へのカメムシ類の飛来時期は年次変動が大きく、飛来数も場所によって異なることから、飛来状況をよく観察して防除する。

イ、園内への飛来が多い場合はネオニコチノイド剤、有機リン剤、合成ピレスロイド剤のいずれかを散布する。

M ぶどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. ベと病	平年並 (前年よりやや遅い)	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (±/±)。

イ、6月中旬の巡回調査において、巨峰とシャインマスカットの発病葉率及び発病花穂率は0% (平年0%) でいずれも平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、果樹試験場予察ほにおける葉での初発日は平年7月22日である。

イ、袋かけ前の散布は果房への散布むらがないよう注意し、散布後は速やかに袋かけ作業を行う。

ウ、発病が見られる場合は、7月中旬までに袋かけを行い、袋かけ後直ちに薬剤を散布する。

エ、薬剤は、エトフィンフロアブル (R A Cコード : 22) 、ジャストフィットフロアブル (同 : 43・40) 、フェスティバル水和剤 (同 : 40) 、ベトファイター顆粒水和剤 (同 : 27・40) 、ホライズンドライフフロアブル (同 : 27・11) 、ライメイフロアブル、ランマンフロアブル (同 : 21) 、レーバスフロアブル (同 : 40) 、銅剤 (コサイド3000、ムッシュボルドーDF、I Cボルドー66

- D、Zボルドー等）（同：M1）又は4－4式ボルドー液のいずれかを散布する。
- オ、ホライズンドライフロアブルは果粒が小豆大以降、フェスティバル水和剤、ベトファイター顆粒水和剤、ライメイフロアブル及びランマンフロアブルは大豆大以降の散布で、果粉溶脱を生じるおそれがあるので、散布時期に注意する。なお、ボルドー剤（ムッシュボルドーDF、Zボルドー等）は袋かけ後に使用する。
- カ、ムッシュボルドーDF、Zボルドー及びコサイド3000は、薬害（落葉）のおそれがあるので、クレフノン100倍を必ず加用する。
- キ、QoI剤（RACコード：11）、QiI剤（同：21）、カルボン酸アミド剤（同：40）又はシモキサニル（同：27）を含む農薬及びエトフィンフロアブルは年間1～2回の使用とし、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 灰色かび病	－	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、6月中旬の巡回調査における発病葉率は、キャンベル・アーリーが1.6%（平年0.1%）、巨峰が0.5%（平年0.0%）、シャインマスカットが0.2%（平年0.0%）でいずれも高かった（ /+）。
- また、発病花穂（果房）率は、キャンベル・アーリーが6.2%（平年0.1%）、巨峰が2.9%（平年0.1%）でいずれも高かった。シャインマスカットは1.5%（平年0%）だった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、6月27日発表の防除対策情報第7号を参照して防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 晩腐病	－	平年並（－）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、開花期の巡回調査におけるキャンベル・アーリー、巨峰、シャインマスカットの発病花穂率は、いずれも0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発病果房は摘み取り、焼却する。
- イ、笠かけや袋かけは薬剤の散布後7日以内に行い、7月中旬までには終える。やむを得ず7日以上空ける場合は、笠かけや袋かけの前に追加散布をする。
- ウ、袋かけ前の散布は果房への散布むらがないよう注意し、散布後は速やかに袋かけ作業を行う。
- エ、防除薬剤は、オーソサイド水和剤80（RACコード：M4）又はオンリーワンフロアブル（同：3）とする。ただし、オーソサイド水和剤80は1,000倍液で散布し、使用時期は収穫30日前までなので、散布時期に注意する。
- オ、耐性菌の出現を回避するため、オンリーワンフロアブル（RACコード：3）は年間使用回数を1～2回とし、連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. チャノキイロアザミウマ	—	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、6月中旬の巡回調査におけるキャンベル・アーリー、巨峰、シャインマスカットの被害花穂（果房）率は、いずれも0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生が多い場合は、エクシレルSEやスカウトフロアブル、ダントツ水溶剤、テッパン液剤、ディアナWDG、バイスロイドEW、モスピラン顆粒水溶剤等を散布する。

イ、ダントツ水溶剤は小豆大期以降、テッパン液剤、モスピラン顆粒水溶剤、バイスロイドEW、ディアナWDGは大豆大期以降の散布で、果粉溶脱を生じるおそれがあるので、その前あるいは袋かけ以降に散布する。また、エクシレルSEは果実に葉斑や果粉溶脱を生じさせるおそれがあるので、袋かけ以降に使用する。

ウ、袋かけ前の散布は果房への散布むらがないよう注意し、散布後は速やかに袋かけ作業を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. クビアカスカシバ	—	多い（-）

(1) 予報の根拠

ア、防除適期決定ほ（2地点）における6月1～4半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は448頭（平年125頭）で多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、6月19日発表の防除対策情報第5号を参照して防除する。

N 飼料作物

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. アワヨトウ（第2世代幼虫）	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、6月4半旬までの糖蜜トラップ（2地点）における総誘殺数は、4頭（平年4.7頭）で平年並だった（ /±）。

イ、6月4～5半旬の牧草地等巡回調査における第1世代幼虫は0.01頭/m²（平年0.12頭/m²）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除を必要とする牧草地は少ないと見込まれるが、群生相となった黒化型の幼虫が確認された場合はスミチオン乳剤で防除する。牧草の刈り取りはスミチオン乳剤散布後14日以降に行う。

イ、本種は突発的に発生することがあるので、今後の予察情報に注意する。

IV. 気象予報

令和5年6月22日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（6月24日～7月23日）

(1) 予報のポイント

- ・ 暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に期間の前半は、かなり高くなる見込みです。

(2) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

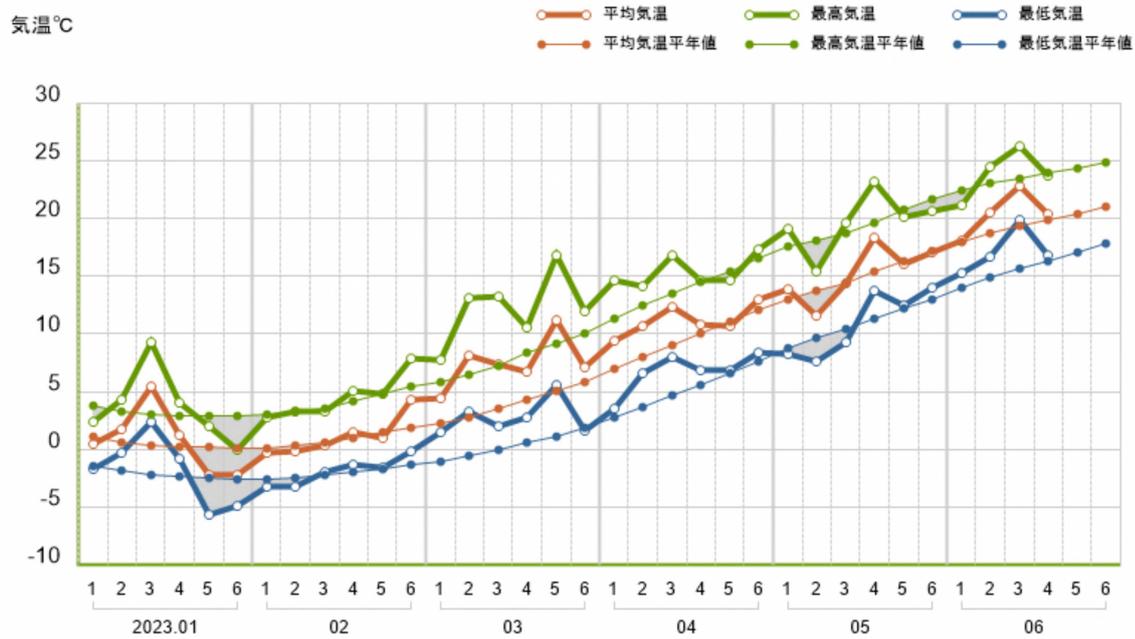
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	10%	30%	60%
降水量	30%	30%	40%
日照時間	40%	30%	30%

(3) 気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

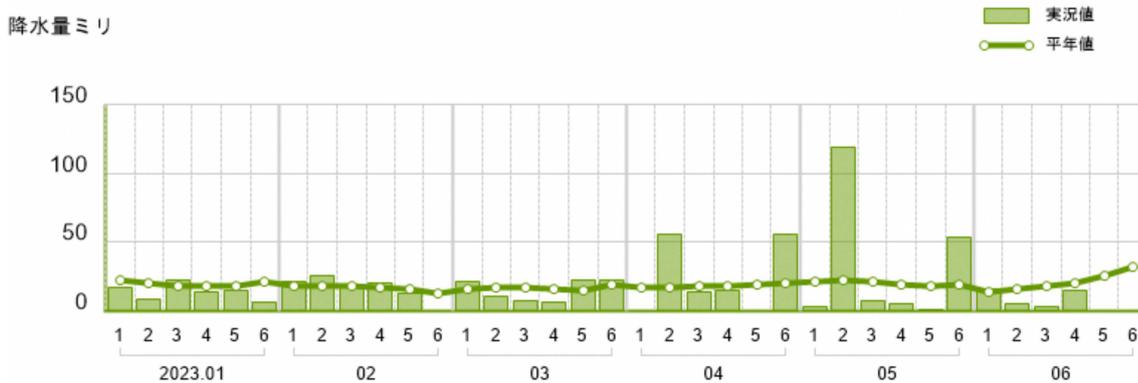
	低い	平年並	高い
6/24～6/30（1週目）	10%	10%	80%
7/1～7/7（2週目）	10%	30%	60%
7/8～7/21（3～4週目）	30%	30%	40%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～6月4半旬 秋田県農業気象システムより)

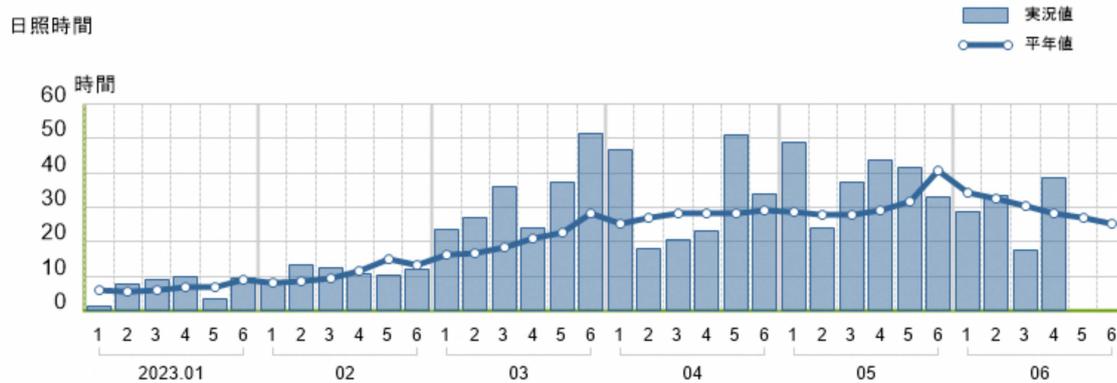
気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生日からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い		平年並				やや遅い		遅い			

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「+」、「早い」場合は「-」となります。発生量が「多い」場合は「+」、「少ない」場合は「-」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40%で低い（少ない）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解説
高い(多い)確率が50%以上 (20:40:40)	高い(多い) 平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上 (40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	平年並 ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

令和5年度秋田県農薬危害防止運動
～農薬を安全に正しく使いましょう！～

6月1日から8月31日まで「農薬危害防止運動」の実施期間です。
農薬の安全かつ適正な使用及び管理を徹底しましょう。

守ろう農薬ラベル 確かめよう周囲の状況

ラベルの確認



帳簿に記録

周辺への配慮



飛散の防止



土壌くん蒸剤は必ず被覆



施錠して保管



移し替え厳禁

https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_tekisei/

農薬の適正使用 農林水産省

検索



詳しくは
こちら

令和5年度農薬危害防止運動 農林水産省・厚生労働省・環境省・都道府県共催

秋田県・秋田県植物防疫協会
令和5年6月1日～8月31日

Copyright © 2023 MAFF